



Title	昭和13年の新作能《正高》の背景：時局性と地域性
Author(s)	朝原，広基
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2024, 9, p. 39-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94713
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

昭和13年の新作能《正高》の背景―時局性と地域性―

演劇学 博士前期課程1年

朝原 広基

1、はじめに

本発表では、大阪府岸和田市を拠点として活動した観世流能楽師・杉江櫻國（1880～1956）が、昭和13年（1938）4月に謡本を刊行した新作能《正高》の内容を検討し、その背景を探ることを目標とする。

《正高》は、日本の南北朝時代に、南朝方として土丸城（現・大阪府泉佐野市土丸）を拠点に活動し、南朝・天授6年／北朝・康暦2年（1380）7月17日^①に室町幕府の軍による攻撃で敗死した「橋本正高」という武将を主人公とした能である。しかし、南北朝時代の同時代史料には「橋本正高」なる人名は確認できず、かつて「橋本正高」とされていた人物は、現代の日本中世史研究においては「橋本正督」とされているなど、不明確な人物である。

謡本刊行時における「橋本正高」のイメージの確認を通し、新作能《正高》の背景として、作者・杉江櫻國の活動が、泉州地域の活動と深く関係していたことを明らかにしたい。

なお、《正高》は新作能であり、一般に知られた作品ではないため、概要を左に示す。

諸国一見の旅人が、大和・紀伊行脚の後、河内や和泉の古跡をめぐるため、大木の里（現・大阪府泉佐野市大木）へ到着する。そこに、犬鳴山・七宝瀧寺のありがたさを謡いながら、犬鳴山の野守の老人が現れる。老人が、犬鳴山の名の由来である、主の獵師を救った犬の伝説を語り、旅人は犬まで忠義に尽くすことに感動する。彼らは七宝瀧寺に到着すると、旅人は境内の様子、瀧の数々を褒め、そして七宝瀧寺の中興・志一上人を招いた人物として橋本正高の話となる。正高の父は楠木正成の首を千早に届けた橋本八郎正員であり、その父の後を継ぎ南朝方として活躍したこと、同族・楠木正儀が北朝に降ってから南朝方で戦ったこと、京都の足利義詮を近江へ追い落としたことなどが語られる。続いて、正高がこもった土丸城からの景色が紹介される。山に目を向けると、土丸城が傲った楠木正成の名城・千早城や、様々な山寺の中や南朝御座所の金剛寺が見え、海側に目をやると兵庫・明石・淡路の手前に、岸の和田氏が建造した岸和田城も見え、これらは全て南朝方ゆかりの地だと述べる。そのうち、老人のあまりに詳しい様子に、旅人が何者かと尋ねると、老人は月の出を待つように述べて姿を消した。

旅人が土丸城で再来を待っていると、「散ればこそいとゞ桜もめでたけれ」と和歌を

① 『花宮三代記』康暦2年7月20日条。

口ずさみつつ、橋本正高の霊が生前の姿で現れる。高名の里（大阪府貝塚市半田）で討たれたが、今もなお英霊として君辺に仕へ奉っていることを語る。そして、迎えた天皇の慰みに、大伴家持の長歌の一節を踏まえた「大君の。御前に死なめ。大丈夫は。水漬く屍。苔むす屍」と謡い舞うと、天皇も御顔を和らがせになったので皆感涙した。そこに火走神社に仕える宮人が現れ、正高に敵軍が迫ることを伝える。正高は家臣の勝重兄弟に天皇の警護を命じ、金剛寺への還御を見送る。そして土丸城に上り、応戦の準備にかかる。味方五百に対し、敵軍三万もの大軍だが、準備が整わない様子を見て、須山勢・田辺成忠・平尾満幸などの家臣たちに命じて攻め寄せると、敵軍は総崩れとなる。

そこで東雲が現れたかと思うと、今までの正高たちの活躍は夢の中に消える。そして旅人たちは正高の忠誠に感動し、その心が国威のもとであると感ずるのだった。

2、「橋本正高」の顕彰―大正時代以前

橋本正高（正督）を含む橋本氏は、和泉国日根郡橋本（現・大阪府貝塚市）を本拠とする、楠木正成などと同様「正」を通字とする楠木氏の一族である^②。楠木一族は、明治維新以降、南朝を正統とする国家的な史観の中で、忠臣として高く評価されるようになる。その反映として、新作能にも様々な楠公物・南朝物が作られた。今回扱う《正高》も、その一つである。

しかし、《正高》の作者・櫻國は、謡本に収載された制作経緯において、「正高が楠木父子に比肩する大忠臣であることは国史に明らかである」としつつも、「一般世人に忘れ去らんとすは誠に遺憾」と記す。謡本が刊行された昭和初期においても、正高は決して広く知られた人物とは言えず、そのことが櫻國の創作動機として強く意識されていたことが分かる。そこで「橋本正高」の歴史的な評価を確認する。

管見に入った最も古いものは、水戸藩二代藩主・徳川光圀が編纂させた『大日本史』において、楠木正成伝から始まる巻一六九列伝第九六に収められた橋本正高伝である。そこには「同族宮内大輔正督等叛降^レ敵、《花營三代記》正高不^レ屈」とあり、『花營三代記』から、橋本正督（宮内大輔）が南朝方から北朝方へ投降したことを把握しつつも、その正督を正高（新判官・民部大輔）とは別人として扱っていることが分かる^③。

続いて嘉永5年（1859）には岸和田藩九代藩主・岡部長慎が儒臣の相馬肇に命じて、雨山麓の成合に「崇忠碑」を建立している^④。碑文「襄者水府西山公、立忠臣碑於湊川上、以表河州大義、民部公比楠氏、而雨山近在、我封内、無片石以記其遺蹟」から、橋本正高（民

② 生駒孝臣『楠木正行・正儀 この楠は正成が子なり、正行が弟なり』ミネルヴァ書房、2021年、7頁。

③ なお、『花營三代記』では橋本正督の官位は「宮内少輔」とあり、『大日本史』の「宮内大輔」は誤記である。

④ 落合保『岸和田藩志』東洋書院、1945年、81・82頁。

部公)を楠木正成(楠子)と並べ、岡部長慎が、徳川光圀(水府西山公)が楠木正成ゆかりの湊川に「嗚呼忠臣楠子之墓」碑を建てたことに倣ったことが分かる。また「須山」「田邊成忠」「平尾満幸」といった碑文における合戦の描写の中の人名が、そのまま新作能《正高》にも見えることが、影響関係を考える上で重要である。

その後、大正8年(1919)11月15日には、大正天皇が陸軍大演習のため、大阪へ行幸した際、地域の「先賢前哲の遺功を追賞あらせられて、贈位の御沙汰」^⑤があり、橋本正高には従四位が贈られた。ただし、この日は橋本正高のみに贈位が行われたわけではなく、同時に百人の贈位が行われており^⑥、特に橋本正高が注目されたものではない。

以上から、橋本正高は江戸時代の『大日本史』以来、南朝の忠臣として意識はされつつも、明治・大正時代においては、特別注目される武将ではなかったことが確認できる。

3、「橋本正高」の顕彰―昭和12年以後

しかし、昭和12年(1937)に突如、橋本正高の顕彰が盛り上がりを見せる。『大阪朝日新聞』昭和12年6月15日大阪府版1に「土丸城址を繞る 孤忠殉國の美挙 偲ぶ泉南の聖雄、橋本正高卿 研究精進の三郷土史家」という記事が掲載された。これは、大阪府泉南郡大土村(現・大阪府泉佐野市大木および土丸)助役・高原義一、同村土丸小学校訓導・西岡政徳、同村火走神社司・柴本長治という三人の郷土史家によって、「孤忠を守り悪戦苦闘三十年、遂に刀折れ矢盡き仆れた泉南の聖雄橋本正高卿の悲壮な殉國美談」が再発信され、正高戦死の日である7月17日に「三氏の肝煎りで城址下の土丸小学校主催、村役場、三氏の後援で海拔三百以上の同城址頂上で盛大な慰霊祭を催す」ことを伝えるものである。

この慰霊祭は郷土史家が主導的立場を果たしつつも、大土村を挙げての行事であった。続報には「同村字土丸の青年團、學童達」が動員され、「夏草繁る登山道に鍬を入れて改修作業をはじめた」ことが伝えられる^⑦。同年7月17日の慰霊祭は、「卿の後裔大阪住吉區播磨町住吉病院長橋本修吉氏夫妻をはじめ大土村土丸、大木、隣村熊取村、日根野村の四小学校児童七百名、郡教育會代表、同小學校長、地元村の南村長以下村議、係長、土丸青年團、婦人會、處女會員ら合計約千名が参列、同村火走神社司芝本氏の司祭で厳肅に祭典を執行」と盛大に開催された様子が伝えられている。

主導的立場にあった郷土史家の一人が、大土村助役という村の指導者であったことが直接の原因であろうが、慰霊祭の例年化・記念碑および休憩所の建設・ハイキングコースの築造などがその慰霊祭の日に決定^⑧、また10月に「継述会」が組織されている^⑨。さらに翌昭和13年9月1日の『大阪朝日新聞』大阪府版1では「橋本正高卿顕彰会」が大木村役場を

⑤ 『大阪朝日新聞』大正8年(1919)11月15日朝刊1面。

⑥ 田尻佐編『増補版 贈位諸賢伝 上』近藤出版社、1975年、「特旨贈位年表」47頁。

⑦ 『大阪朝日新聞』昭和12年(1937)6月17日大阪府版1。

⑧ 『大阪朝日新聞』昭和12年7月18日大阪府版2。

⑨ 『大阪朝日新聞』昭和12年10月17日大阪府版1。

事務所として組織され、橋本正高の崇敬の対象としての絵像が地元の絵師から贈られ、さらに「同族会」の呼掛けが行われていることが報道されている。

新作能《正高》は、このような盛り上がりの中に作られた作品なのである。

4、新作能《正高》と杉江櫻國の活動姿勢

新作能《正高》の謡本について、刊行直後の昭和13年4月17日、『大阪朝日新聞』大阪府版1で報道がされている。

そこでは「かねて餘技として能の翁面をつくり、その土を忠臣橋本正高卿の據城土丸城附近から取つてゐたが深い因縁を感じ」たことを動機とし、「昨秋からひそかに卿の奮戦ぶりを謡曲にものせんものと親しく史蹟をさぐり史實を調査」して制作したとある。昨秋とは、慰霊祭の後、大木村で橋本正高顕彰熱が最高潮に達している時期である。《正高》謡本には「謡曲正高附録 雨山 土丸 史蹟案内 附近コース圖解」と題した別紙が付属しているが、これは大土村でのハイキングコース整備と関連させたものであらう。

しかし、新聞記事には櫻國が「熊取村の雨山登山口に登山杖二千本を寄附した」とあり、正高顕彰の主たる舞台である大土村ではなく、隣村の熊取村に寄付をしている点に注意したい。同記事では、《正高》製作に関して「意見を聞」いた相手として名前が挙がるのは「天野山金剛寺権大僧正曾我部俊雄師、一條公爵、岡部子爵ら」であり、顕彰活動を主導した大土村の郷土史家や、「昨秋」には成立していた継述会などの名は記されない。

一方で、《正高》には南朝の天皇が土丸城を訪れている場面があるが、これは郷土史家の一人・高原義一が所有する大土村内の「御所谷」という地名の山林から、南朝の行在所址が発見されたというニュースを取り込んだものであらう^⑩。

また舞の場面に使用される「水漬く屍」など『万葉集』大伴氏の言立ては、幕末の志士以来の受容が確認できるが、国民に広く浸透するのは昭和12年、信時潔が歌謡『海行かば』を作曲、日中戦争開戦以降、ラジオ番組で繰り返し放送されてからである^⑪。

以上より、新作能《正高》には、当時の時局と泉州地域での活動が強く反映していることが分かる。つまり、「水漬く屍」には、天皇の軍として戦い殉ずることを美德とする、日中戦争下での価値判断に基づく時局性があり、大木村において当時大きく展開していた橋本正高の顕彰による地域性の影響である。泉州地域で活動した能楽師・杉江櫻國の手により、昭和13年という時期だからこそ、作られた新作能であったといえよう。それはまた、作者・杉江櫻國の活動の方向性を示す作品でもあった。

^⑩ 『大阪朝日新聞』昭和12年6月30日大阪府版1による。ただし現在、史蹟としては扱われていない。高原義一の子である高原義秀の聞書（聞き取りは北山理）「大木城と吉祥村御所の伝承」（泉佐野の歴史と今を知る会編 地域論集5『南北朝内乱と和泉』泉佐野の歴史と今を知る会、2015年9月）に、義一が建てた説明文などが掲載されている。

^⑪ 小松（小川）靖彦「大伴氏の言立て『海行かば』の成立と戦争下における受容―その表現および戦争短歌を通じて〈戦争と萬葉集〉―」『國語と國文学』95―7、明治書院、2018年7月。